

目次

- 1 巻頭言 伊谷 原一
- 2 連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第14回 ニホンザルは地域によって違う・・・山極 壽一
- 4 連載「今日もOSARU日和」第4回 たき火にあたる、ストーブにあたる・・・竹下 景子
- 6 連載「生態学者が往く」第10回 インドネシア・バンティムルンの旅・・・湯本 貴和
- 8 連載「野生動物を遺伝子から見る」第5回 父親の意味とは・・・村山 美穂
- 10 連載「野生動物のおなかの中の秘密」第5回 ゾウが創り、ゴリラが育てる森ーウンチの苗床・・・牛田 一成
- 12 連載「大型類人猿探訪」第17回 チンパンジーを守る・・・林 美里
- 14 連載「ウマ学ことはじめ」第17回 ウマの老人ホームで社会の研究・・・越智 咲穂
- 16 連載「自然と芸術」第14回 青いサルの秘密・・・齋藤 亜矢
- 18 連載「海外生息地調査」第17回 森林火災と再生 ～火と共に生きるコアラ～・・・早川 卓志
- 20 連載「動物園・水族館だより」第8回 ゴリラの家族の中で育つということ・・・安井 早紀
- 22 連載「環境教育実践」第16回 動物園でのタッチモニタ研究:サルの知性と社会を学ぶ・・・村松 明穂
- 24 音楽の起源を探して 服部 裕子
- 26 ボノボのメスの「引っ越し」ー老齡のメスが新入りに寛容な社会で 戸田 和弥
- 28 おうちどうぶつえん・ご寄附のお願い

■表紙 P18「森林火災と再生 ～火と共に生きるコアラ～」より
撮影:早川 卓志(北海道大学大学院地球環境科学研究院)

巻頭言

伊谷 原一 (京都大学野生動物研究センター)

日本モンキーセンター (JMC) が公益財団法人化されて6年が過ぎた。この間、附属動物園長を務めてきたが、今春、所長を拝命し動物園長との兼任になった。ますます複雑化に拍車がかかる現代社会において、わたしにこの大役が務まるだろうか。

わたしはこの35年、巡礼のように日本とアフリカを往復してきた。スタートはコンゴ熱帯多雨林の固有種・ボノボの調査だったが、ザイル (現コンゴ民主共和国) での暴動と2度の戦乱で調査は長期にわたり停滞した。そのため隣国のコンゴ共和国でチュウオウチンパンジーの調査に切りかえたが、今度はクーデターによって調査の継続を断念した。

その後、タンザニアで調査をおこなう機会を得た。同国ではタンガニカ湖畔の国立公園・ゴンベヤマハレでヒガシチンパンジーの調査が活発におこなわれていた。しかし、わたしはタンガニカ湖畔から100kmほど東の内陸部にあるウガラをフィールドに選んだ。ウガラは無人の乾燥原野で、森林とサヴァンナ双方に由来する野生動物の宝庫、チンパンジー分布域の東限でもある。一方で、吸血性ツェツェバエの巣窟、食料はおろか水の確保さえ困難、一日の寒暖差が20℃以上という過酷な環境でもある。

はじめてウガラに足を踏み入れ、無数のゾウの糞、屍肉をむさぼるハゲワシ、巨大なライオンの足跡を目にしたとき、わたしは生きてもどれないかもしれないと思ったものだ。それでもウガラに調査基地を設け、暴動やクーデターに妨害されることもなく、25年以上にわたって野生動物を追いかけてきた。

2013年からボノボの新しいフィールドの開拓をはじめた。そのためしばらく訪問が滞っていたが、昨年ウガラを訪れて愕然とした。無残に切りたおされた木々、草をはむ牛群、切り開かれた広大な畑、あちこちで見かける空葉莢と罌。わたしたちの基地は屋根が落ち、壁が崩壊し、まわりには牛糞が散乱していた。あまりにも変わり果てた光景を呆然と眺めていると、遠くからチンパンジーのパントフート (かん高い連続音声) が聞こえてきてわれにかえった。ウガラのフィールドを閉じる決心をした瞬間だった。

思い返してみると、私のフィールドワークは過剰な人間活動の影響を受け続けてきた。しかし、そのつど臨機応変に対応しながら修羅場をくぐり抜けてきた。そして今度は、正体不明の新型ウイルスによって世界中が非常事態におちいつている。この脅威は人類に対する懲らしめだろうか。JMCも臨時休園を余儀なくされたが、アフリカのフィールドワークでつちかった経験をいかし、柔軟に対応しながらJMCの運営にたずさわりたいと思う。



伊谷 原一
いだに げんいち

京都大学野生動物研究センター・教授 (初代センター長)。公益財団法人日本モンキーセンター・所長 / 附属動物園長。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院のコーディネーター。京都市動物園学術顧問。京都大学熊本サクチュアリの初代所長。野生ボノボや野生チンパンジーの生態を通じて、人間社会の起源についての研究を進めている。